
反抗

Like a floor

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

反抗

【Zマーク】

Z9964M

【作者名】

Like a flavor

【あらすじ】

夢見る高校生の小さな、しかし、大きな意味のある反抗。

僕にとって18度目の冬。感じたことは自分の弱さ、金はあまり持つてはいけないという事。それと貧乏への不自由だった・・・。布団に寝そべって考えてみる。大して価値の無い物の為に家族と喧嘩をしたのものだとも思つけれど、きっかけは何であれ相手が悪いと思つてる。そこはさつきと変わらないのだ。これが若いという事なのだろうか、きっとみんなそうなのだ。

だから僕は勝手にしようと思つた、喧嘩相手の考える悪い方向に向かおうと思つたのだ。後悔させてやりたい。ただし、僕にもわかつていて。その考えこそが最も僕を縛つているということを。ああ、明日はクリスマスだ。僕には理解できない、なぜ僕は今までこの時期を心待ちにしてきたのだろうか。冬が終わって春が来れば、全てが変わってしまうというのに・・・。

わざと青いカーテンをはずして、いつもは隠れている青黒く塗られた夜が見える窓を眺めていたが、星の無い夜なんかには飽きてしまつた。ふと振り向くと、勉強机が嫌でも目に付いた。汚ねえ。教科書やら、お気に入りのCDやら、この前買ったパソコンと、その取扱説明書。そんなものでじつた返していくて趣味の詩を書くこともできない。母にも今朝注意されたつけ・・・。少し苦い顔をして机の横のクローゼットに無理やり眼を移した。白い服が多い・・・気がした。これからは白くない服を買おう、黒も嫌だな。

一人部屋としては広すぎる僕だけの世界、不安定な心をうつしているかのようだ。僕がさつき、大きな音をたてて閉めてしまつた茶色いドアの向こうからは、テレビの音と妹の笑い声が聞こえる。僕と喧嘩をしたばかりの母はというと、いつもより口数が少ないのはわかつたが、声を聞いてみるとあまり気にしていない様子だった、僕はムツとした。こんな家にはいたくない・・・。僕は、そのまま

クローゼットの白いジャケットを手に取る。しかし、何だか自分をつまらなく感じたのでジャケットをやめて、その横の赤いジャンバーを羽織つてさっとドアを開ける。みんなテレビから目を離さない。僕は自転車の鍵を素早く掴むと、いつてきます、も言わずに乱暴にリビングから飛び出て、靴を持って、玄関のドアを開けた。「帰つてくるもんか。」そう心の中で呟いた。後ろで母が何か言つてゐるのが聞こえた。

僕は外に出て、きちんと靴を履いて階段を下りていく。思つたより寒くなかった。駐輪場で迷つて結局、歩くことにした。勿論、あてはまつたく無いのだが、今回も何とかなりそうな気がした。歩道の街灯を背に受けて、暗い方に向かい歩く事になんだか知らんがわくわくしていた。メールも電話も来ない携帯の画面を見つめる。友達の家にでも行こうかと思つたが、そんな気分でもないので、ただ歩く。

僕はその頃、『ずっと思つていた事は実現する』という話しを信じて暇さえあれば将来の妄想をするようになっていた。この時もそれに努めた。僕は来年、韓国に留学する予定なので、妄想はそこから始まつた。

僕は最初の一年ハングルを学ぶので周りの人間も日本人ばかりだが、人見知りする僕は最初の内は内気な青年を演じているのだ。本を読み誰も相手にしない。

半月ほど経つて、一見内気な僕はある男の目に止まる。男は友の多い陽気な好青年で歳は僕と同じ、特に理由も無くなんとなく孤独そうな僕に話しかけたのだった。話してみると、男と僕は馬が合い、その日から行動を共にするようになった。二人とも寮住まいで、しかも僕は203号室、男は206号室でここには204号室は無かつたから205号室を挟んですぐ近所だった。その事を知つてから

はよくお互いの部屋を行き来する。やがて男は僕の親友になつた。この親友との出会いが僕の運命を大きく変えるのだった。

急に僕はふと現実に戻つた。家から南に三キロほど離れた所、見慣れた『BOOK』の看板が見えた。何か欲しくなつた、あまり金は使いたくないがとにかく入つてみた。中は暖房がきいて少し暑い。僕はジャンバーを脱いで手で持つたまま、文庫本のコーナーに足を向けた。入り口側の戸棚から太宰を探しだした。五冊ほど置いてあつたが、見たところ目当てはなかつた。一応裏側にまでまわつて面白そうな本は無いものかと見てみたが、先週だか友人が言つていた「一」の字が目に付いたくらいで、別に心動かされるものはなかつた。

別の本屋にも行こうかな。僕はいつもなら見て回るCDコーナーや、ファッショングッズも頭をよぎつたが、目標をひとつに定めて何とか外に出た。「うわ・・・寒い。」思わず肩をすぼめた。すぐにジャンバーを着なおして、駆けるように更に家から遠い本屋に向かつた。妄想の続きをしながら・・・。

親友と一人で慣れない韓国の街を歩く。昼飯に焼肉を食べて、そのまま見て回ることにしたのだ。韓国のファッショングッズは日本人の僕達にはあまり満足できないものであつた。それに習いたてのハングルも当てにできない、だから自然と食べ物にしか興味を持ちえないのだ。しかし、今は焼肉といつしょに僕はメシを4杯、親友は3杯をたらいげた後だ、いつもならおいしそうに見える屋台のなにからも（僕はあまり韓国には詳しくないので今わかるのは屋台のなにかしらという事だけだ）今は胃の苦しみを思い出させるだけである。つまり僕たちは文字通り、ただ街を歩いていた。

だが、ある店の前でふと親友は立ち止まつて言つた。「ちょっと

見てみないか？」僕は親友の目の前の小さな店を見た、看板はハングルで読めないが、何の店かはわかつた。ガラス窓越しに並んでいるのは、高級そうなギターだった。興味のあつた僕は、けれどもなんでもない風に「ああ。」と言つた。親友は先頭をきつて入つてつた。

そういうえば、親友の部屋には何本かベースというものが置いてあつたのだ。弾いてるところは見たことがないけれど・・・。

親友はずつと少年のような無邪気な笑顔だった。「おい、見ろよ！」そんな事を言つては、僕にこのギターはどこどこのだれだれが使つてたモデルだなんて事を、本当にうれしそうに話した。僕は親友からいつ例のことを聞かれるのかと内心ドキドキしながら聞いていた。親友の興味は、明らかに一時のものではないのだ。

そして中古の物を売つてている棚まで歩いていった頃、ついに僕の夢への扉は開かれた。「お前、楽器は弾けるの？ バンドとかに興味ある？」不意に親友は僕にそうたずねてきた。僕は自分の心臓が大きく鳴つているのがわかつた。「楽器はやつたことないな。でもバンドに興味はある。」あくまで自然に、中古のアンプの方を見ながら、何でもないよううにそう答えるのだ。そしたらきっと親友は僕にバンドを組もうと誘つてくる「楽器が駄目ならお前が歌え、お前が必要なんだ。」そう言つてくるに決まつてゐる。

親友は僕に背を向けて「どうか、でも弾けないんじゃあな。」と冷たく言つた。

だめだ・・・不意に邪念が入つた。僕の恐れている事が自由な妄想の邪魔をしてきた。僕は両目をつむつて首を左右に振り「違うつて」と呴いた。しようがないから一時妄想を休憩して、今日の母との喧嘩について整理することにしよう。

何度も言つが、僕は悪くない。僕は自分がアルバイトした金で、携帯オーディオ機器を買おうと思つただけなのに。そう、僕の稼いだ金で・・・。すぐそうしても良いのだが、一応その事を母に相談した。母は「そうしなさい。」と言つれば良かつた。なのに母は「来年のためにも、金はためておけ。」と言つのである。そして僕は母と口論した。しかし母は、考えを変えない。「来年の色々な準備のためにとつておけ。」そう言つのだ。僕は怒りに任せて、「元はといえば、家が貧乏なせいだ。」と口にしてしまった。母は悲しそうな顔をした。

僕の父は外科の医者である。給料は沢山入るが、父はそれを、「僕には救えない命の為に」と言つて寄付してしまうのだ。それこそ、自分自身や家族の身を削つてである。僕は小さい頃から教育されてきたこともあつたので、そのことに怒りなど感じない、おかしいとも思わない。むしろそれを誇りに思うし、僕は父を尊敬しているのだ。しかし、そのことで不自由するとそれを言い訳に、わがままになつてみたり、嘆いてみたりするのだ。自覚してるし、悪い癖だとも思つが中々なおすのは難しい。

もう一つ、我慢できない事がある。父が僕にもそれを望んでいることだ。医者になつて寄付行為をしてほしいと、口癖のように言つ。寄付行為は正しいことだし、素晴らしいと思つ。だが、医者になるか何になるかは僕の自由だ。僕も段々、自我というものを持つてきているのだ。夢だつてあるのだ。僕は先ほどの妄想のようにして、いわゆるミュージシャンになりたい。これは誰にも口外していいないのだが、高校に入つてから三年間、ずっとと思い続けてきた夢なのだ。ミュージシャンにだつて、寄付はできる。才能はあると思わないが、本気だ、気持ちでは誰にも負けないと思つ。毎日、小さな努力をしているのだ。それでも時々、無理なんじやないかと思うことがある。今日も仲間とカラオケに行つた。僕は歌うことが大好きだし、人並みより上手いやつが仲間内にいるのもまた確かなのだ。そういう時

それを外的には認めながらも、僕のほうがヴィジュアル的には上だとか、自分を騙すいいわけを考えるので必死になる。だから今日も不機嫌であった。そうして今回も、母にそれをぶつけてしまった。母は「もう勝手にしなさい。」と言つて後ろを向いてしまった。「ああ勝手にしてやるよ。」僕は自分の部屋にこもつた。こうして思つてみると、僕にも悪い点は確かにある。いや勿論、相手も悪いが。言い過ぎた。

考へてゐるうちに本屋についた、僕は田当での本があるにしろ無いにしろ、ここを見たら帰ることに決めた。素直に謝り。ジャー
バーは着たままで、中に入つた。

ここは本屋は、さつきの本屋より店自体は小さいが、品揃えが良い。有名な本だし、きっと見つかる。文庫本のコーナーは見つけたが、どうも並びが分かりにくい。僕は、近くの年とった店員に本の名を出して聞いてみた。店員は「じざいますよ。」と、思ったよりかん高い声で言つた。口元だけの笑顔で、黄色い歯が田についた。「お兄さん、若いのに珍しいねえ。」というようなことを言われて少し恥ずかしかつたので、「宿題で出されたんで。」と嘘をついておいた。帰つたら読もう。楽しみができる、機嫌も良くなつた。何もかもが上手くいきそうな気がする。さて、帰り道ではまた、将来の自分を思い浮かべながら帰ろうつかな。

僕たちは2011年の夏に、バンドを結成する。

メンバーは人脈の広いベース担当が、そこそこ出来るギターとドラムを連れてきた。四人は音楽性もあっていたため、すぐに信頼関係を築き練習できた。最初のうちには日本のあるバンドの「ピーバンド」としてやっていこうということになった。この元のバンドは完全に僕の趣味によるものであった。僕たちは秋に行われる、学校の文

化祭で発表することに決めた。寮の誰かの部屋に集まってミニーティングし、練習はそれぞれが暇を見つけてやっておく。そして週一回はどこか防音設備の整った部屋で合わせてやってみる。時には仲間に厳しく言わなくてはいけないときもあるが、そうやって切磋琢磨していくのだ。

秋になった。文化祭は毎年、外の施設を借りて盛大に行われる。観客はほとんどが韓国人だ。僕たちの出番は、とりの一つ前。今まで味わったことのないような種類の緊張・・・あと・・・10組。あと5組、もうすぐだ。次の次だ・・・もう駄目だ。そういうしててる間に、うちの学校のスタッフに「次ですので、スタンバイしてください。」と言われた。もうどうにでもなれ・・・観客の大きな拍手。そして、鳴り止むと司会の大声。わけもわからぬまま、僕は先頭に立つてステージに飛び出した。

テレビで見る観客の群れとはまったく違うのだ。一人一人がやはり生きている・・・。飲み込まれそうになつた。無理だ・・・。ふと右を向く、そこにはベース担当の彼が同じように僕を見ていた。僕たちは笑つた。ドラムが威勢良く叫ぶ、多少のズレはあつたがベース、ギターと続していく。観客はわけもわからなく盛り上がりしている。僕もわからないまま歌うのだ。会場は一つになり、あつとう間に僕たちの最初のステージは終わつていた。

僕は買った本を隠すようにして、我が家に戻ると母親にそれとなく謝つた。そしていつも通りテレビを見始めた。母も機嫌が直つて、しばらくは家族で平和なひと時を過ごしていたが、さつき買った本のことを思い出し、部屋に入った。そしてパソコンで音楽を流しながら、読書をした。一時間ほどたつた。僕の部屋には暖房などなかつたので、しばらくすると足が冷えて集中できなくなつてきた。僕は本を持って、リビングの方へ出てみた。リビングでは母が一人でこたつでチラシを見ていた、僕はソファを選んで落ち着いた。

母はそんな僕を一瞥すると、低くこう言つた。「三日前あなたが買つてきたパソコン、明日買えば一万円も安かつたのよ。」その言葉がまた、本当に嫌味っぽく聞こえたのだ。僕はしかりつけるように、「だからどうした！？別に俺が自分の稼いだ金で買つたんだ。お前に文句を言われる筋合いはないね。」と怒鳴つた。母は少し困つたように言い返した。「別に文句を言つたわけじゃないわよ。ただ明日にすれば良かつたね、って。」僕はおさまらなかつた。「もう買つちゃつてからじゃあどうしようもないだろ！あんたが忠告しなかつたのが悪いんだ。」母は急に静かな声になつて「まあ・・・、これ以上お金は使わないとおれは良いけど。」といつたのである。何をいつてやがる。僕は自分でバイトをして金を稼いだのだ。なぜこいつにその使い道を決められなくてはいけないのだ！！僕はドカドカと自分の部屋に向かい、「あんたの言うとおりにすると思ったら大間違いだ。もう好きにしてやる！！」と捨てゼリフを吐いて、相手の返事も待たずドアをバタンとしめた。僕は布団を乱暴に敷いて、頭まで掛け布団をかぶつて目をつむつた。

もうあんなやつの思い通りになんかなるもんか！！僕の金は今年の内に全部使い切つてやる。将来だつてろくな仕事になんかつくもんか、二ートになつて、それで親のすねをかじつて生きてやる。子供の育て方を間違えた。と後悔させてやるんだ。・・・そこまで思つて、考え直した。いや、二ートは格好がつかないな、そうだった。僕はミュージシャンになるのだ。文化祭での演奏を成功させて・・・。それから・・・。毎夜と同じように妄想が始まつた。

僕たちは学校で有名になつた。バンドのメンバーもギターが変わつた。もっと上手いやつが参加を希望してきたのだ、前のやつは快く譲つた。それから僕たちはコピーバンドを辞めて、自分たちの曲を作り始めた。僕は主に作詞を担当した。韓国のライブハウスでライブも行つた、月に一回くらいのペースで。季節はもう冬になつて

いた。僕たちはクリスマス色に塗られた街を歩く。すれ違う人の中には、僕たちを知っている人が何人かい、ハングルで応援してくれる、僕はハングルで「ありがとう。」と返すのだ。僕たちは、歩きながら大事な決定をした。日本に帰ろうと。日本でも活躍して、プロを目指そうと。立ち止まりソニーの前で誓うのだ。年末に韓国のファンに、ライブの最後でその事を伝える。ファンはみんな応援してくれた、泣いてくれた子もいた。

こうして僕たちは日本に帰り、苦労もあるが2年後に大物アーティストの目にとまり、メジャーデビュー。日韓両方からの爆発的な人気を集めていくのだ。そして、史上最高のバンドとして名を残す。

恥ずかしくなる程甘つたれた妄想だが、僕は満足した。そのまま明日になるのを静かに待つことにした。

気だるい月曜の朝、僕は学校に行く準備のために目を覚ました。布団をたたみ、カーテンをめくる。あぐびしながら。お口様に向かって背伸びをする。いつもと変わらぬ朝だった、少なくとも今のこところは油断していた。

リビングに出ると、珍しく父が居て、朝飯を食べていた。母はない。父の隣に座つて、机の上の新聞を広げた。「母さんは?」僕は何気なく聞いてみた。父は口に入つたご飯をゆっくり飲み込んでから、「昨日の晩から気分が悪いんだと、風邪だらうな。」と言つて、焼き魚に箸を向けた。

母は頑固なくせに、些細なことで悩むたちだ。昨日の僕との口論を気にして風邪になつたのかもしれない。母はもう去年50を過ぎた。僕と同じ高校生の母親としては高齢のほうだし、元々体も病弱だった。長くないのかもしれない。僕は不安になつた。もし長くないとしたら僕の自立した姿は見せられないだろう。そんな親不孝なことは無い。ましてや、その時に僕が成功するかもわからないミユ

ージシャンなどを目指していると知れば・・・。母は不安を持つたまま死んでしまうだろう。それでいいのだろうか？もし両親の願いである医者を志して、医大などにでも通つていれば・・・。母も希望を抱いて逝けるだろう。医者を目指すべきなのか。来年から韓国に留学する事は僕の腹の中では決まつていたが、僕は今からでも医大に合格するのも不可能ではないのだ。

母の遺伝か、僕は思い悩むと止まらない。その内に、母の風邪が自分にも移つた氣すらもしてきた・・・。これでは学校どころではない。父はもうすぐ仕事に行くだろう。母も朝からパートにいくが、今日は休むかもしれない。病氣の母ならやり過ごせるが、問題は父だ。僕はとりあえず、準備を万端にして、父に「いってきます。」

と言つて。学校に行くよつに思わせた。父が仕事に行く時間を過ぎたら、家に戻つてこよつ。玄関で靴を履いて、僕は外に出た。階段を下りて、自転車の鍵をゆっくりあけて、用心して毎朝通つている道を走り始めた。

だるそうに自転車をこぐ。家に帰つたら、母になんと言おうか。熱っぽいとでも言えればなんとかなるだろう。そう思つていると、後ろから父の車が走つてきた。父は僕に並ぶとすぐに追い越して行つた。僕は罪悪感で胸が痛くなつた。助手席には、風邪をひいた母が乗つていた。父の車は右折していつた。父は母を母の勤め先に送つているのだ。50過ぎの母は風邪をひいても、貧乏な家の為に仕事をするんだ。なのに僕は・・・。いや、しかし僕は僕なんだ・・・。しばらく行つて、僕はブレーキを握つた。分かれ道だ。左の上り坂を登ればすぐ学校に着く。右の道を行くと、ある女子大生の家に行き着く。彼女の年は僕の一つ上で高校の先輩だ。来年の僕と同じように韓国語学大学に通つていて、一昨日から冬休みで帰つてしまつた。まだ家に居るだろう。久しぶりに会いたいな。実を言うと、この先輩が僕を韓国大学に誘つてくれたのだ。そういうえば彼女もバンドをやつていたつけ。

母の姿を見て僕は思い直し、休まないでちゃんと学校に行こうと

思った。思つたが、しかし、足はペダルをこいでくれない。左の坂はいつもよりずっと急に見えた。僕はしばらく動けなかつた。

今、左右のどちらを選ぶかによって、これから僕の人生が大きく変わる気がした。ここで母の思つとおりになつてしまつのか？僕の夢はどうなるのだ？

僕は心を決めて、ペダルをこいだ。ゆっくりと自転車は加速していく、風を切る。僕は決心したのだ。

(後書き)

高校生の時、書をました。感想よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9964m/>

反抗

2010年10月8日13時39分発行